

平成 17 年 7 月 1 日	<b>病害虫発生予報</b> <b>7 月号</b>	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
--------------------	-------------------------------	------------------------

**安心・安全な農作物は、農薬使用の記録と農薬使用基準の遵守から！**  
**農薬の総使用回数は「有効成分」で規制されます**

< 目 次 >

<b>I. 今月の予報</b>	
<b>【注意すべき病害虫】</b>	
水稲：いもち病(葉いもち) . . . . .	1
水稲：斑点米カメムシ類，イネツトムシ . . . . .	2
ナシ：黒星病，輪紋病，果樹カメムシ類 . . . . .	3
夏ネギ：べと病，ネギアザミウマ . . . . .	4
<b>【その他の病害虫】</b> . . . . .	5
水稲，サツマイモ，ナシ，ブドウ，カキ，夏ネギ，夏秋ナス，抑制トマト	
<b>II. 病害虫ミニ情報</b>	
水稲の斑点米カメムシ類の防除について . . . . .	7
果樹のカメムシ類について . . . . .	8
農薬登録速報（5月）の概要 . . . . .	9
<b>III. 病害虫資料室</b>	
今月号の病害虫から . . . . .	10
<b>IV. 今月の気象予報</b> . . . . .	
11	
<b>V. テレホンサービス</b> . . . . .	
11	
☆普通作物	0 2 9 ( 2 2 6 ) 5 3 2 1
☆園芸作物	0 2 9 ( 2 2 6 ) 6 1 3 1

本文に記載された農薬の登録内容は、平成 17 年 7 月 1 日現在のものです。  
農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認してください。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。  
茨城県病害虫防除所   Tel :029-227-2445  
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。  
ホームページアドレス <http://www.jpnn.ne.jp/ibaraki/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや遅い	やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在，葉いもちの発生は平年より少ない（表1）。
- ② 6月末に曇雨天が続き，感染に適した条件となった。7月上旬に発生量は増加すると考えられる。

表1 葉いもちの発生状況（6月下旬調査）

	葉いもち発病度			発生地点率 (%)		
	本年	前年	平年	本年	前年	平年
県北	0.3	0.7	2.5	10	28	33
鹿行	0.0	0.0	1.4	0	0	21
県南	0.2	0.1	0.4	5	5	14
県西	0	0.1	0.1	0	9	8
全県	0.2	0.2	2.0	6	14	20

[防除上注意すべき事項]

- ① 全体の傾向としては少ない発生であるが，常発地では防除が必要な水田がある。水田をよく観察し，現在発生がみられるほ場では薬剤防除を行う。
- ② 主な薬剤としては，フジワン乳剤，ラブサイドフロアブル，ブラシン粉剤 DL，キタジンP粒剤，オリブライトパック等がある。
- ③ 粒剤は必ず湛水状態で散布し，4日間は湛水状態を保つ。その後生育に応じた水管理を行う。
- ④ 例年梅雨明けとなる7月下旬まで発生量は増加する（図1）。現在発生がみられないほ場でも，注意が必要である。
- ⑤ 20～25℃で連続した弱い降雨が続いた場合は，感染好適条件であるため，発生には特に注意する。

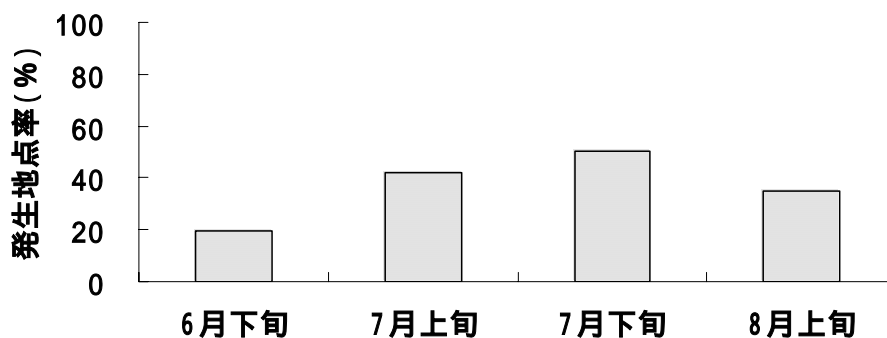


図1: 葉いもち発生地点率の推移 (平年)

## 2. 斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在，水田周辺のイネ科雑草におけるクモヘリカメムシ成虫の発生は平年並である(表1)。

表1 水田周辺のクモヘリカメムシ発生状況(6月下旬調査)

調査地点数	発生地点数(地点率)			
	本年	前年	平年	
県北	33	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)
鹿行	6	1 (17%)	0 (0%)	0 (0%)
県南	20	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
県西	11	0 (0%)	0 (0%)	1 (7%)
全県	70	1 (1%)	0 (0%)	1 (2%)

[防除上注意すべき事項]

- ① 農道や畦畔等のイネ科雑草は斑点米カメムシ類の生息場所となるため，除草に努める。出穂期近くになってからの除草は行わない。
- ② 穂揃期に多数の斑点米カメムシ類を認めた場合は防除を実施する。
- ③ 穂揃期以降は，観察または，すくいとり調査により幼虫の発生を認めた場合に薬剤防除を行う。
- ④ 幼虫の防除は適期に行う。幼虫の防除適期は予報8月号を参考にする。  
(p. 7 病害虫ミニ情報参照)

## 3. イネツトムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在，多発生した昨年と同様，一部ほ場ですでに幼虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 葉色の濃い水田では発生に注意する。
- ② 被害の大きい次世代幼虫は7月中～下旬から発生するので，水田をよく観察し，発生が多い場合は，幼虫が小さいうち(幼虫がイネの葉先を巻き始めた時期)に薬剤防除を実施する。

## ナ シ

### 1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発病果率は県南地域及び県西地域で平年よりやや高く、果実における発生地点率は県西地域において平年より高い。
- ② 6月下旬現在、県北地域での発病果率は平年より低い、調査圃場以外で多発生圃場が散見されている。
- ③ 本病は降雨によって伝染するため、梅雨期には発生を助長する条件になる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した果その基部、葉及び果実は二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、土中深く埋める。
- ② 発病部位を除去した後、防除暦に基づき、7月上旬のストロビードライフフロアブル及び7月中旬のアンビルフロアブルの散布を確実に実施する。
- ③ 果実肥大最盛期は果実への感染が特に盛んになるため、7月中旬のアンビルフロアブルの散布は必ず実施する。
- ④ 薬剤散布量は、10a当たり3000を目安にし、かけむらのないよう丁寧に散布する。
- ⑤ 薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ⑥ 薬剤耐性菌出現回避のため、DMI (EBI) 剤の年間使用回数は原則3回以内に抑えることが望ましい。

(6月28日発表の病害虫発生予察注意報第2号及びp.10病害虫資料室を参照)

### 2. 輪紋病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬調査時のいぼ皮病斑の発生は平年並であった。
- ② 梅雨期は感染に適した条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 降雨によって感染するため、曇雨天が続く場合は降雨の合間に薬剤散布を行う。
- ② 降雨が多い場合には散布間隔をつめ、10a当たり3000を目安にかけむらのないよう丁寧に散布する。
- ③ 胞子の飛散を防止するため、伝染源であるいぼ皮病斑を削り取り、トップジンMペーストの原液を塗布する。

### 3. 果樹カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや遅い (第2回成虫)	やや少ない～少ない	県下全域

(ナシ 果樹カメムシ類続き)

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在, チャバネアオカメムシの予察灯への誘殺数は平年よりやや少ない。
- ② 本年は, 果樹カメムシ類の主要な餌のひとつであるスギ・ヒノキの球果が多いため, 果樹園への飛来は平年よりやや遅いと予想される。

[防除上注意すべき事項]

- ① 7月以降に発生する第2回成虫の活動状況については, 今後の防除所の最新情報を確認し, 防除の参考にする。
- ② ナシ園でカメムシ類を発見した場合は, MR. ジョーカー水和剤等の薬剤による防除を行う。
- ③ 薬剤散布量は, 10a 当たり 3000を目安にし, かけむらのないよう丁寧に散布する。
- ④ 薬剤散布は, カメムシ類の活動が鈍い早朝に行う。

(p. 8 病害虫ミニ情報参照)

## 夏ネギ

### 1. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在, 発病度は平年よりやや高く, 発生地点率は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 葉に灰白色のかびの生えた病斑が見られる場合には, 早期に防除を実施する。その後も曇雨天が続く場合には, 発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布量は, 10a 当たり 2500を目安にし, 丁寧に散布する。また, 薬剤を散布する際は, 収穫前日数に十分注意する。
- ③ 肥料切れは発生を助長するため, 生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

### 2. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い~多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在, 被害度, 発生地点率とも平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると, 向こう1か月は, 気温が平年並か高いと予想され, 発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 気温の上昇に伴い増殖が速くなるので, 発生状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布量は, 10a 当たり 2500を目安にし, 丁寧に散布する。また, 薬剤を散布する際は, 収穫前日数に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	縞葉枯病	発生量：少ない	6月下旬現在，縞葉枯病ウイルスを媒介するヒメトビウンカの発生は少ない。
	紋枯病	発生量： やや少ない	6月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。例年発生が多い水田や，葉色が濃く，茎数が多い水田では発生に留意する。
	稲こうじ病	発生量：平年並	穂ばらみ期～出穂期にかけて低温で降雨が多いと発生が多い。
	ニカメイガ	発生量：平年並	フェロモントラップ（龍ヶ崎市）の誘殺数は平年並である。
	イネクロカメムシ	発生量：平年並	6月下旬現在，山林付近の水田周縁部で発生を認めている。
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
ナシ	アブラムシ類	発生量：平年並	6月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。黄色水盤（岩間町）への誘殺数は、平年よりも多い。
	ナシヒメシクイ	発生量：平年並	6月下旬現在，フェロモントラップ（岩間町）への誘殺数は平年並である。被害果を認めたら土中深く埋めるなど速やかに処分する。
	ハマキムシ類	発生量：平年並	6月下旬現在，予察灯（かすみがうら市）への誘殺数は平年並である。
	ハダニ類	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。袋かけ前の防除を徹底する。
	べと病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
	晩腐病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。袋かけ前の防除を徹底する。
	チャノキイロアザミウマ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。袋かけ前の防除を徹底する。

作物	病虫害名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
カキ	落葉病類	発生量：平年並	降雨により感染するため、防除を徹底する。
	カキクダアザミウマ	発生量： やや多い	6月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
夏ネギ	さび病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
	黒斑病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
夏秋ナス	マメハモグリバエ	発生量： やや多い	6月下旬現在，平年よりやや多い発生である。 発生初期の防除に重点をおき，その後の発生状況に応じて薬剤散布を行う。
	ミカンキイロアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	6月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	ミナミキイロアザミウマ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
抑制トマト	ミカンキイロアザミウマ	—	TSWV（トマト黄化えそウイルス）を媒介するため，定植前後の防除を徹底する。
	アブラムシ類	—	CMV（キュウリモザイクウイルス）を媒介するため，定植前後の防除を徹底する。

## II. 病害虫ミニ情報

### 水稻の斑点米カメムシ類の防除について

水稻の斑点米カメムシ類のうち、本県の水田では、クモヘリカメムシによる被害が最も多く発生します。これまでクモヘリカメムシは県北、鹿行、筑波山周辺等で多発していましたが、近年は県南地域の平坦部でも生息密度が高い地点がみられます。これまで発生が少なかった地域でも斑点米カメムシ類の発生には注意が必要です。

#### 発生生態（クモヘリカメムシ）

クモヘリカメムシ成虫の体長は 16mm 前後で、水田周辺のイネ科雑草では 7 月上旬頃から生息を認めます。その後、イネの出穂とともに水田へ移動して穂を吸汁、加害し、葉や穂に産卵します。ふ化した幼虫は収穫期までイネの穂を吸汁、加害しながら成長し、約 1 ヶ月で成虫になります。幼虫の成育期はイネの登熟期であるため、幼虫密度が高いほど斑点米も多く発生します。

#### 防除対策

- 1) 周辺よりも出穂の早い水田では飛来が集中し、被害が大きくなる場合があります。また、出穂の遅い水田も、周辺の水田等で増殖した新成虫が集中して飛来するので、同様に注意が必要です。
- 2) 農道や畦畔などのイネ科雑草はイネを加害するカメムシ類の生息場所となるので、除草に努めて下さい。出穂期近くになって除草すると、雑草にいるカメムシ類を水田へ追い込むことがあるので、除草は出穂の 10 日前までには終わらせて下さい。
- 3) 薬剤による防除時期は、①成虫飛来期（出穂期～穂揃期）あるいは②幼虫発生期（乳熟期～糊熟期）です。発生が少ない場合はいずれか 1 回、発生が多い場合は、①と②の 2 回、さらに幼虫の発生状況に応じて追加散布が必要です。
- 4) 穂揃期に多数のクモヘリカメムシ成虫が飛来している場合は、不稔粒が発生し、減収となるので必ず防除を行って下さい。その後は、幼虫の発生を認めた場合に防除してください。

※幼虫の防除は、幼虫の発生盛期に行うと最も効果的です。予想発生盛期（防除適期）を病害虫発生予報 8 月号等で情報提供します。

- 5) 主な防除薬剤には下記があります（表 1）。成虫および若齢幼虫が主体の場合は、残効の長い MR. ジョーカー、ダントツ H 粉剤 DL、スタークル粉剤 DL 等を用い、中・老齢幼虫が主体の場合はスミチオン等を用いて下さい。クモヘリカメムシには、薬剤抵抗性を獲得したとの報告は無く、どの薬剤でも十分な効果が期待できます。

表 1 カメムシ類に農薬登録のある主な薬剤（平成 17 年 7 月 1 日現在）

農薬名	施用量または希釈倍率	収穫前日数-剤の使用回数	成分名	成分の使用回数
スミチオン乳剤 *	1,000 倍	21-3	MEP	4(本田期 3 回)
MR.ジョーカーEW	2,000 倍 60～150ℓ/10a	14-2	シラフルオフエン	2
ダントツ H 粉剤 DL	3～4kg/10a	14-3	クロチアニジン	4(本田期 3 回)
スミチオン粉剤 3DL	3～4kg/10a	14-3 (出穂前 1 回)	MEP	4(本田期 3 回)
MR.ジョーカー粉剤 DL	3～4kg/10a	7-2	シラフルオフエン	2
スタークル粉剤 DL	3kg/10a	7-3	ジノテフラン	4(本田期 3 回)
アルバリン粉剤 DL	3kg/10a	7-3	ジノテフラン	4(本田期 3 回)

\*スミチオン乳剤は、取扱メーカーにより、農薬登録の有無が異なるので注意して下さい。



## 果樹のカメムシ類について

チャバネアオカメムシやクサギカメムシなどのカメムシ類は、ナシやカキなどの果実を吸汁加害するため、防除上重要な害虫となっています。これらのカメムシ類の県内での発生状況及び発生生態などについてお知らせします。

### 1 本年の発生状況

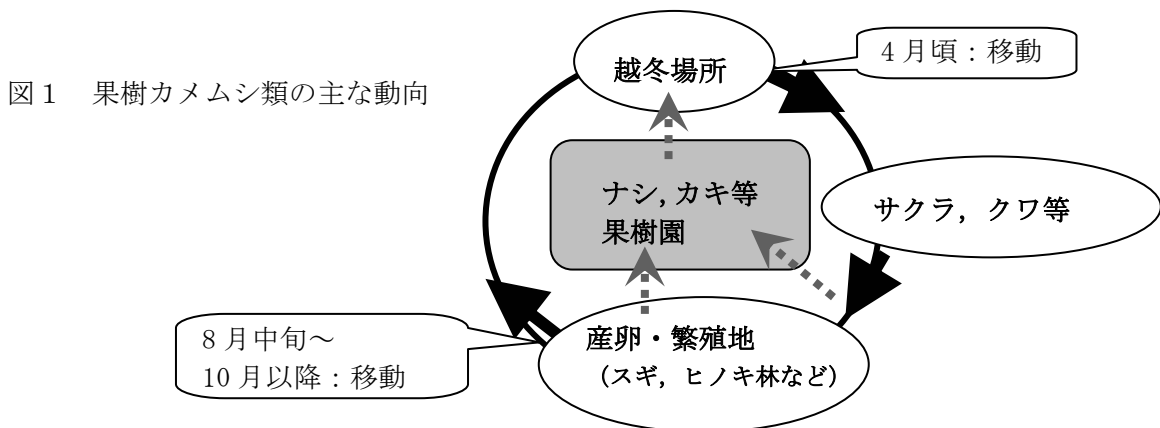
カメムシ類の越冬量は、過去9年中最も少なく、また、6月下旬までの、予察灯への誘殺数は平年よりやや少ない状況です。従って、**越冬した成虫（越冬世代成虫）**のナシ園への飛来数は平年より少ないと予想されます。

しかし、今年のカメムシ類の主要な餌のひとつであるヒノキ球果の量が多い傾向であるため、**次世代以降の成虫**の発生量は多くなると考えられます。成虫の発生量に対してヒノキ球果などの餌が不足した場合には、果樹園への飛来、吸汁が多くなる恐れがあるので今後の防除所の情報を参考にしてください。

### 2 発生生態

果樹のカメムシ類は、落葉の下や建物の隙間などで、成虫で越冬します。越冬した成虫は、サクラやクワなどに移動し、それらの果実を吸汁します。その後、繁殖地であるスギ・ヒノキ林で球果が充実してくるとそちらへ移動します。果樹園へは、この移動の過程で飛来します。

繁殖地では、主にスギやヒノキの葉や球果に産卵し、7月頃から新世代成虫が出現します。このため、**6月頃までは越冬世代成虫の発生量が多い場合、また、7月頃からは新世代成虫の発生量に対して餌となるスギやヒノキの球果量が少ない場合に、果樹園への飛来が多くなる**と考えられています。成虫は年2～3回発生し、11月になると越冬場所へ移動し、休眠します。



### 3 防除対策

- 1) 物理的防除：多目的防災網（6mm 目及び 9mm クロス目以下）の設置が有効です。これにより吸蛾類や気象災害（雹）による被害も同時に軽減することができます。
- 2) 薬剤防除：カメムシ類は茨城県赤ナシ無袋栽培（ジベレリン無処理）病害虫防除暦の防除体系で被害を回避できますが、多発生時には、次々と園内に飛来するので、散布回数を多くしたり、残効の長い薬剤を用いるなど、工夫が必要です。薬剤の散布は、カメムシ類の活動が鈍く、風のない早朝に行ってください。また、各薬剤の使用できる回数や収穫前日数には充分注意して下さい。

今後も病害虫発生予報、病害虫防除所ホームページ、テレホンサービスなどの情報を参考にしてください。

## 農薬登録速報（4月）の概要の訂正

病虫害発生予報6月号でお知らせした「農薬登録速報（4月）の概要」を下記のように訂正します。

1. 4月中に変更のあった「ゾーバー」は「殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤」ではなく「除草剤」です。

2. 4月中に、新規・変更登録のあった農薬に次の農薬を追加します。なお、農薬の使用にあたっては、必ずラベル等を確認してください。

### ○ 殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤

新規>Dr. オリゼアドマイヤー箱粒剤, タフバリア粒剤0.5, ダントツオリゼメート24箱粒剤, ビルダーアドマイヤー箱粒剤

変更>アディオフロアブル, アドマイヤーフロアブル, カスケード乳剤, パスポートフロアブル, スコア顆粒水和剤, ストロビードライフロアブル, パンチョTF顆粒水和剤, ブルースカイAL, マイトコーネフロアブル, マトリックフロアブル

### ○ 除草剤

新規>大豆バサグラン液剤（ナトリウム塩）

変更>ハービー液剤, ロニー粒剤, STハービー液剤

### ○ 植調剤

変更>フラスター液剤

## 農薬登録速報（5月）の概要

平成17年5月期間中（5/1～5/31）に新規・変更登録のあった農薬は、以下のとおりです。なお、農薬の使用にあたっては、必ずラベル等を確認してください。

### ○ 殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤・殺そ剤等

新規>アミスタートップフロアブル, シバンバフロアブル, ダイブフロアブル

変更>イオウフロアブル, コテツフロアブル, サルファーゾル, スコア顆粒水和剤, ストロビーフロアブル, スピノエース顆粒水和剤, ソイリーン, ダーズバンDF, ダブルストッパー, ハチハチフロアブル, ハチハチ乳剤, ボルドー液用粉末生石灰, マブリック水和剤20, メリーネコタリウム, モンガリット粒剤, ランマンフロアブル

### ○ 除草剤等

変更>ザーベックスDX1キロ粒剤, ソイリーン, ダイナマンジャンボ, テマナックス

### ○ 失効農薬

アグロススターナ粉剤DL, アグロススミチオン乳剤, アグロスディプレックス乳剤, アグロスリードゾン粒剤, アグロスレトリーフロアブル, アニバースMC, エチマシン, カルダ1キロ粒剤, グラスジンD水和剤, グラスジンD粒剤, グラスジンM水和剤, グラスジンM粒剤, シンジェンタ・ジャストミート顆粒水和剤, トリガード水和剤, バイエルオリゼメートプリンス粒剤, バイエルバイバッサ粉剤DL, パドアップ, ピレナック水和剤, フェスティバルC水和剤, フジモンロムダンF粉剤DL, ヘキストバスタ液剤0.2, ホクコーカスラブバリダルーバン粉剤3DL, ホクコーカットワン粒剤, マラバッサFD, ミカノール, モンサントパドアップ, レピタームフロアブル, レルダンモンカットF粉剤DL, 一農セビン粉剤2, 三共ヒノザン乳剤30, 住化ノックワン粒剤, 石原グラスジンD水和剤, 石原グラスジンD粒剤, 石原グラスジンM水和剤, 石原グラスジンM粒剤, 日産バスタ液剤0.2

※ 農薬の登録失効は、同一成分の農薬においても販売メーカー毎になりますので、ご注意願います。

### Ⅲ. 病害虫資料室

#### 【今月号の病害虫から】

※病害虫防除所ホームページで図, 写真をご覧ください。  
ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/ibaraki/>

#### ナシ

#### 黒星病

**被害の様子**：主に葉や葉柄，りん片（芽基部，果そう基部），果実などに，黒色すす状の病斑を生じ，落葉，落果，裂果を引き起こす（写真1～3）。夏から秋にかけては，葉裏にうすい黒色の病斑（秋型病斑）を生じる（写真4）。

**発生生態**：3月中旬頃から，前年に秋型病斑を生じた落葉上に子のう胞子が形成され，5月下旬頃まで降雨によって分散し，伝染源になる。りん片病斑（後に芽基部・果そう基部病斑となる）上に形成された分生子も開花期頃から降雨時に分散して葉や果実への伝染源となる。その後，病斑上に形成された分生子は降雨時に分散して二次伝染を繰り返す。9月以降に秋型病斑を生じた落葉は，翌年の伝染源となる。また，10～11月にはりん片への感染が盛んになり，これも翌年の伝染源となる。

#### 防除のポイント：

##### ① 伝染源の除去

- ・ 落葉は集めて土中に埋める。（この作業が出来ない場合には，ロータリーをかけて，落葉をすき込むだけでも効果が期待できる）
- ・ **発病した部位は見つけ次第必ず除去し，土中深く埋める。特に春先に発病したりん片（芽基部，果そう基部）の除去は極めて重要である。**

##### ② 薬剤による防除

- ・ 防除適期は，催芽～萌芽期（3月下旬），開花前後（4月上～下旬），梅雨期（6月下旬～7月中旬）及び収穫後～秋季（9月中旬～11月上旬）である。特に，**りん片脱落直前，落花期及び果実肥大最盛期前（7月中旬）のDMI剤の散布は必ず行う。**
- ・ 薬剤散布量は，10a当たり3000を目安に十分な量を丁寧に散布し，かけむらのないよう努める。

※ DMI 剤：ステロール脱メチル化阻害剤。病原菌体のステロール生合成過程における代謝の一部（脱メチル化反応）を阻害する薬剤の総称であり，現在ナシの黒星病に対する予防及び治療効果が最も期待できる薬剤である。ナシの黒星病に登録のある主な DMI 剤（平成 17 年 7 月 1 日現在）には，商品名スコア水和剤 10，インダーフロアブル，アンビルフロアブル，マネージ DF 等がある。なお，**薬剤耐性菌の出現を避けるために，DMI 剤の年間使用回数は原則 3 回以内に抑えることが望ましい。**

写真 1 果そう基部上の病斑

写真 2 葉柄上の病斑

写真 3 果実（幼果）での被害

写真 4 葉に形成された秋型病斑

#### IV. 今月の気象予報

##### 関東甲信地方1か月予報

(予報期間 7月2日から8月1日)

気象庁(7月1日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高い、降水量、日照時間は平年並でしょう。

<1週目の予報> 7月2日(土曜日)から7月8日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

<2週目の予報> 7月9日(土曜日)から7月15日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か高い

<3週目から4週目の予報> 7月16日(土曜日)から7月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か高い

#### V. テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病虫害の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

☆普通作物 029(226)5321

7月上旬 水稲いもち病の発生現況と防除対策について

中旬 水稲のいもち病と斑点米カメムシ類の対策について

下旬 水稲の穂いもちと斑点米カメムシ類の対策について

8月上旬 水稲及びダイズ病虫害の発生現況と防除対策について

☆園芸作物 029(226)6131

7月上旬 露地野菜病虫害の発生現況と防除対策について

中旬 施設抑制栽培の病虫害発生現況と防除対策について

下旬 果樹病虫害の発生現況と防除対策について

8月上旬 露地野菜病虫害の防除対策について